

いいんですか！
絵美先生



ルンルン

いいんですか！

絵美先生

著者：ルンルン

部屋の奥まで侵食した夕日が、すべてを茜色に染め上げる。

インターホンの音が、粘りつくような静寂を切り裂いた。

「――あ、はい」

ドアを開けると、そこには資格試験対策講座の講師、絵美が立っていた。

薄い上着を羽織っただけの彼女の肩が華奢（きゃしゃ）に思えた。

だが、その頬は奇妙なほど紅潮し、息が甘く弾んだ。

「すみません。これ……忘れ物です。ロッカーの奥に、残っていて」

「ああ、ありがとうございます。助かります」

たくみはノートを受け取る。その際、指先同士が不意に触れ合った。

ビクリ、と絵美の指が震え、しかし離れようとはしなかった。

指先から伝わる熱が、予想以上に熱い。

それだけで終わるはずのやり取りだった。

玄関で靴を揃え、絵美は一步外に出かけて――動きを止めた。

ほんの一瞬の空白。

だがその背中では、何かを必死に飲み込み、あるいは誘うような躊躇いを見せていた。

「……すみません」

振り返った絵美は、濡れた瞳を上目遣いにたくみに向けた。

「少しだけ……休ませてもらっても、いいですか」

その声は、懇願というよりは、吐息に近かった。

理由は聞かなかった。

聞いてしまえば、この奇妙な均衡が崩れる気がしたからだ。

たくみは無言で、廊下の奥へと彼女を招き入れた。

「どうぞ」

薄暗くなり始めたリビングに通すと、絵美はソファの端に、浅く腰を下ろした。

ストッキングに包まれた膝を揃える衣擦れの音が、妙に残る。

背筋は伸びているが、その内側で何かの糸が切れかかっているのが分かった。

「お忙しいのに……こんな時間に、すみません」

「いえ」

短い会話の間にも、彼女から漂う微かな花の香りが、部屋の空気を変えていく。
先に口を開いたのは、絵美のほうだった。

「最近……少し、塾で息が詰まりそうで」

淡々とした口調とは裏腹に、膝の上に置かれた白い指先は、行き場をなくしたように震えている。

「“先生”でいることが……時々、仮面のように重たくて。誰かの言葉が、全部棘になって突き刺さるんです」

たくみはただ、静かに頷いた。

薄闇の中で浮かび上がる彼女の横顔は、聖職者である「塾の先生」の顔ではなく、傷ついた一人の「女」の顔だった。

「正解なんてないって分かっているのに……私が私でなくなっていくみたいで」

そこで言葉が途切れ、彼女の喉が小さく鳴った。

たくみは、意識して声を低く落とした。

「……それは、きついですね」

その一言が、彼女の琴線に触れたようだった。

絵美の肩から、ふっと力が抜ける。

「ありがとうございます」

潤んだ瞳が、揺らめきながらたくみを捉える。

「そう言ってもらえたの……久しぶり、です」

窓の外で風が唸り、部屋の中の静寂がいっそう際立つ。

たくみは距離を詰めなかった。

だが、その視線は無意識に、彼女の無防備な首筋や、乱れた呼吸に合わせて上下する胸元へと吸い寄せられていた。

「先生って……想像以上に、孤独な仕事なんですね」

その言葉に、絵美が顔を上げる。

その表情（かお）には、もはや教師としての威厳など欠片も残っていなかった。

ただ、誰かに縋りたいと願う、頼りないほどの弱さが露呈していた。

「……はい」

短く答えたあと、彼女は熱っぽい溜息を漏らす。

「今日は……もう、立っているのもやっとで」

「無理しなくていいと思います」

たくみの声色が、優しさの中に微かな支配欲を孕んだものになる。

「今日はもう、十分に戦ったんですから」

絵美は何も答えず、唇を噛みしめ、長い睫毛を伏せた。

その姿は、まるで断罪を待つ罪人のようであり、同時に慈悲を乞う少女のようでもあった。

二人の間の距離は、手を伸ばせば触れられるほどに近い。

その一線を超えていないという事実だけが、かえって官能的な緊張感を高めていた。

沈黙は、気まずさではなく、甘い蜜のように二人の間に垂れ込めた。

たくみは、絵美の横顔をじっと見つめる。

目の下に滲む疲労の影さえもが、今の彼女をあどけなく、そして淫靡に見せていた。

——この人は、今、壊れかけている。

直感が告げていた。

誰かの前での「清廉な先生」でも、「愛想の良い大人」でもない。

彼女は今、何者でもない空っぽの器としてここにいる。

そして、その空虚を何かで埋めてほしいと、無言で訴えている。

その事実、たくみの胸の奥にある、暗い火種に油を注いだ。

自分が特別なことをしたわけではない。

ただ、逃げ場を与えただけだ。

それだけで、聖女のような彼女が、こうも無防備に蕾を開こうとしている。

背徳感と、嗜虐的な征服欲。

それが混ざり合い、たくみを揺さぶった。

——これは、踏み込んではいけない内側か、それとも。

いいんですか！絵美先生

著者・制作：ルンルン

発行：2026 年 2 月
